

「
妄もう
想そう
綴こ
」
」

『
雑木林
春夏秋冬
』

九谷くたに
六口むくち

何十年か前まで、東京の練馬には自然があった。

二十一世紀に入り数年が経った今、異常気象とも思える異変が各地で起きている。突然の豪雨や竜巻とも思える突風、空梅雨と熱暑。このような現象は、日本だけでなく地球規模で起こっている。大水や猛暑が、ヨーロッパを襲い、地球温暖化は、幾つかの国を海に沈めようとしている。

ふと心配になってくる。確固たる存在であるはずの地球だが、どこか変調をきたしているのではないか。

あるテレビ番組で科学者が語っていた。

「地球の寿命は、約百億年です。現在、地球の年齢は、四十数億歳。あと五十数億年で太陽に呑み込まれます」

なるほど、地球にも寿命があるのか。地球も悠久なる宇宙の中で命を育む一つの生き物なのだ。そう思うと、何やら愛おしさのようなものを感じてくる。そして地球上に生きる数多なる生き物。人間も彼らの仲間だ。確かに仲間ではあることに変わりはないのだが、ちょっと他の生物とは異なる部分がある。知恵を発達させ、技術なるものを発展させたのだ。これは素晴らしいことなのだが、人間の独り善^{みか}が過ぎていても言える。快適な生活を送りたいこの欲求。これを満たすためだけに知恵や技術が使われている……。

異常気象を見ていると、地球は、病んでいるのではないかと心配になってくる。人間は、森林を伐採し、焼き払ったが、これは地球にとっては火傷^{やけど}である。コンクリートで覆った。これでは息苦しくなるに決まっている。便利な化学製品を生み出し、使い、川や海に捨てた。皮膚病になってしまふ。地球の内部から掘り出したエネルギー源を、惜しげもなく燃やし、動力とした。炭酸ガスに覆われた地球は、着膨れ状態になり、体が火照ってしまふ。

このような状態で、地球は、寿命を賣^うっ当^あてできるのだろうかとか心配になるが、多分、病身のまま五十数億年を生き抜くだろう。問題は、地球上の生き物

たちだ。このまま地球の病状が進めば、百年後、千年後…… いや、何年後かは判らないが、確実に生きるために必要な環境はなくなっていくだろう。ノアの箱舟ではないが、何処かの星を見つけ、移住でもしなければ、死に絶えるに決まっている。

どうも憂鬱になってくる。私は、コンクリートの建物の中で、寒ければ暖房を、暑ければ冷房を利かせ快適な毎日を送っている。地球が病んでいるとすれば、私も病状を悪化させた一人かもしれない。良いではないか、自分が生きている間は、それほど酷くはならないだろう。それに、ちっけな自分が、地球を救うことなどできない。気になるのであれば、暖房、冷房を控えめにすれば良い。精々、これくらいが関の山だ。

私は、五十数年前から東京の練馬に住んでいる。

此処には素敵な自然があった。だが、自然と呼べる環境は、二十数年前に終っている。宅地化などにより田圃、畑、野原は埋め立てられ、そして雑木林は切り倒された。いや待て、私が練馬に来た時点で、既に宅地化が始まっていたのだ。やはり私も、自然破壊の共犯者なのだ。壊された自然を元に戻すことは不可能に近い。死んでしまった土を回復させることは至難の技だ。

日本には、まだ自然が残っている。地球規模での自然破壊を憂うことも大切なことだが、今、残っている自然に目を向け、大切に守り、共存を考えることへの気持ちはないだろうか。

自然との触れ合いは、人間の心を豊かにしてくれる。特に子供たちにとって大事なことだ。机に向かい、一所懸命勉強することも大切なことかもしれない。夜遅くまでテレビゲームを楽しむことも否定はしない。しかし、自然の中には、思いもよらない感動が待っていてくれる。それに生き物を慈しむ心を養える。

子供の頃、実家の前には武蔵野の雑木林があり、季節の移り変わりを知る事ができた。四季折々に姿を変える雑木林は、その時々々の贈り物を子供たちに与えてくれた。

私も、数多くの想い出を持つことができた。

春



最近では温暖化のせいであろうか、東京の雪は少なくなったようだ。当時、冬には、きちんと雪が降り、春にはきちんと雪が解け、草花の芽吹きを見ることができた。

私が好きだったのは、早春の風景。

白い雪に覆われていた雑木林の所々にポツカリと穴が開き始める。その穴から檜、くぬぎ、栗、杉、薄などの濡れた枯葉や落ち葉が見え出す。気の早い草花は、そんな穴の中で緑の芽を出しだす。さー、そろそろ起きなくちゃ。そんな雰囲気であった。そして、暖かい陽の光が、一つ一つと穴の数を増やしていき、茶色や黒の世界が広がっていく。雑木林には、こんもりと丸い、お供え餅のような雪が点々と残り、春が進むにつれて一つ一つが姿を消していく。陽が当たらないところでは、大きな雪の塊が、結構長い間残り、冬があったことを教えてくれる。そして、木々の芽吹きは、そこいらじゅうに春が来たことを告げる。

この頃になると、雑木林で気に入った草花の芽を捜し、掘り起こして自分の庭に植えるのが、子供たちの楽しみだった。特に、紡錘 形紡錘の山百合の芽を見つけた時は、有頂天である。何本も見つけ、あの独特の香りのある大きな花

が咲くのを待ったものだ。山百合は、百合の王様、女王様である。

幾重にも重なり、濡れていた落ち葉は乾いていき、それともにもふっくらと厚みをもつてくる。薄茶色に乾いた落ち葉の絨毯とんぼくの上に寝転び、暖かい陽の光を浴びるのが好きだった。落ち葉の匂いは、乾いた土の匂い。周りは黄緑色の芽や若葉。

雑木林の前に広がる畑では、寒い冬に麦踏あひだされた麦たちが、姿勢良へまっすすへに伸びている。梅の花に続き、そろそろ桜が芽吹く季節。

早春から春へ。雑木林の木々は、スツカリ緑色になる。今度は、緑の葉っぱと黒と茶色の幹の世界。そんな中に、薄いピンク色の染井吉野が控えめに花をポツリポツリと付けはじめ。暖かな日、一気に染井吉野は、華やかな姿に変身する。待ちに待った季節だ。桜は誇らしげに咲き誇る。そして、少し遅れて山桜が、緑色のしっかりとした葉っぱを見せはじめ。

冬の風の音は「ユーヒュー」と聞こえるが、この季節になると「サワサワ、ザワザワ」と聞こえる。うっそうと茂った木々の葉っぱが擦れる音だ。雑木林を草が覆い、地面は緑一色になる。そして人が歩く細い道だけが土の色である。

この頃になると雑木林の中に入るのは大変である。薄うすや笹の葉で、腕などに傷をつけてしまうのだ。しかも、薄たちは子供の背丈を越えている。気を付けながら林に入り込み、秘密の場所を作る。道からちょっとしか離れていない所でも、周りからは見えない。まだ残る枯れ葉などを集め、小さな丸い場所を作る。そこに寝転ぶと、見えるのは薄や笹の葉、そして空だけ。そんな中で、ちよっと気取って本を読んだりする。だが、本を読むのが目的ではない。誰も知らない秘密の場所で、何かを遣っている事が楽しいのだ。自分だけの世界だ。

杉の木は、格好の展望台だった。テッペンまで登って周りを見渡す。雑木林しか見えない。杉のテッペンも自分一人だけの世界だ。風が吹くと杉の木は

揺れる。自分も一緒になって杉の木を揺らす。大きく大きく揺れ出す杉は、フランクの逆である。杉の木は強く、いへら揺らしても揺らただけで、折れることはない。空気の中を大きく動いているのは自分だけではないか。そんな錯覚すら感じさせてくれた杉の木。

不思議なものだが、今は、高い所から撮った映像などを見ているだけで足がすくんでしまう。高所恐怖症ではないかと思ってしまうのに、子供の頃はこんな遊びをしていた。

雑木林の話から、ちょっと脇道に……

高い所というと思い出すことがある。小学校高学年の頃だったと思うが、実家から一キロほど離れたところに高圧線が通ることになった。

畑に鉄塔が建設される。空に伸びて行く鉄塔を見るのが楽しみだった。鉄塔が完成した。高さは、二十数メートルあったと思う。当時は、建設中であっても囲いなどはなかった。大らかな時代である。夕暮れ時、もうすぐ電線が渡されるのかと鉄塔を見上げていた。周りには誰もいない。ふと登ってみたくなった。四角錐の稜線には、きちんと長い鉾（つば）が打つてあるので、簡単に登ることができる。難なく鉄塔のテッペンに着いた。素晴らしい景色だった。

家々の灯り、少し離れたところにある大通りに流れる車のライト。風は、ほとんどなかった。

何か記念になるものを残したい。私は、ポケットからハンカチを取り出しテッペンに結びつけた。工事の人が、このハンカチを見てどう思うだろうか。それを思うと愉快だった。だが、まだ納得できなかった。こんな経験は滅多にない。面白い事を思いついた。こんなところで小便をした人間などいないはずだ。意気揚々と小便をした。実に気持ち良かったことを覚えている。さて、降りよう。下りも何ら問題はなかった。だが、手が濡れてくる。雨は降っていないのに、良く見ると所々に水が付いている。その時、自分の愚かさを知った。それは、自分の小便だった。

雑木林は、チャンバラごっこにも最適な場所だった。敵味方に分かれ、枯

れ枝を刀代りにチャンチャンバラバラ。何ちゃんが、本気で切ったと泣き出した。刀を放り出し取っ組み合いの喧嘩をしたり……そして、敵味方が、互いに秘密の陣地を作り、先に見つけた方が勝ちになる遊びをした。

この遊びは大変である。仲間同士の誓いがあるのだ。相手に捕らえられても場所を教えないとの誓い。相手を捕らえ白状させるが、乱暴はしない。

当時の子供たちは痛みを知っていた。木に登り落っこちた時の痛み、前を歩く仲間が木の枝を掻き分けたのは良いが、それが跳ね返り、頬にパチンと当たった時の痛み、転んで擦りむいた時の痛み……皆、遊びの中で痛みを経験している。相手が痛がることはしない。偵察隊を出し相手の陣地を捜す。薄で血だらけになりながら捜す。でも、その時は痛くはない。風呂に入った時に痛みを思い出すだけだった。

必ず、ガキ大将がいた。その日の遊びを計画し、何人かの仲間を引き連れ指揮をとった。あの当時、いじめっ子は、仲間には入れてもらえなかったように思う。仲間に入りたかったのだろうが、いつも孤立していた。ガキ大将は、いじめっ子から仲間を守らなければならない。大抵の場合、年上で体力あるものがガキ大将を勤めた。

春は入学式があり、そして新学期の季節。ガキ大将が抜けていったり仲間が抜けていったり、新しい仲間が入ってきたり……

私の通った小学校は、古かったが大きく立派な校舎であった。校庭には、大きな桜の木があった。この桜は、一つの根から三本の大きな幹が出ていた。三本桜。見事な、そして立派な三本桜であった。入学式に合わせたかのように満開になる。この三本桜が、小学校のシンボルだった。

小学校の五年生を迎えた時、この小学校は三つに分割された。生徒数が増えたためだ。私たちは団塊の世代と呼ばれている。うろ覚えだが、引越しの時は、地面がぬかるんでいたように思う。新たな小学校に移る時、先生や生徒全員が、手で持ち運べる物を携えて列を成し行進した。前の小学校は、私の実家

から徒歩で三十分は掛かったが、新しい小学校までは歩いて十分ほどの距離。私は、通学が楽になると喜んだが、通学時の思いは、掛かる時間には関係がなかったようだ。私の生活サイクルには、全く変化がなかったように思う。

私は、この小学校の第二回卒業生。何となく第一回の方が、格好が良いのにと考えたことがあった。

我々が去った校舎には、中学校が移ってきた。それまでの校舎が狭くなったためだと思う。校舎、校庭、そして三本桜は中学校になった。

そして私は、その中学校に入った。小学校の入学も、そして中学校の入学も、同じ三本桜が迎えてくれた。

中学三年生の時、私は入学式で生徒代表として新入生を迎える言葉を話すことになった。別に心配はしなかった。先生が、原稿をくれるはず。だが、入学式が近付いてきたのに、先生からは何の話もない。おかしい。先生に聞いてみた。

「先生、入学式で話す原稿は、まだですか」

「何言ってるの。自分で考えなさい」

その時、かなり困ったことを覚えている。だが、ピンと閃いた。私は、三本桜を主人公に、迎える言葉をまとめた。その時の原稿は、今も何処かにしまっているはずだ。だが、時の流れを変える事はできない。その懐かしい三本桜は、今はない。

話の順番が逆になってしまったが、幼稚園にも通った。幼稚園は、この三本桜がある校舎の隣にあった。幼稚園児の足では五十分ほど掛かったが、私だけでなく近所の子供たちも皆、幼稚園児の頃から小学校の四年生まで徒歩で通ったことになる。今、考えると良くも通ったものだと思心する。中学に入ると自転車通学が許される。幼い子供が一時間近くも歩き、中学生が自転車。安全を考へればいつなるのかも知れない。

通園、通学路の周辺には、畑、果樹園、野原が広がっていた。道の一ヶ所

に、お茶の木畑が続いていた。白い花びら、黄色い雄しべや雌しべ。子供心にも綺麗だと思った。

幼稚園は、お寺の中。大きな寺だった。恐々、寺の本堂を探索したのを覚えていた。お寺の裏も雑木林。幾つもの石像が顔をしかめて座っていた。夕方は、怖くて歩き回る事はできない。今も立派なお寺だが、当時の深遠なたたずまいや、幽霊でも出そつな雰囲気はなくなっている。

道の途中には氷川神社があった。縁日にはいろいろな屋台が所狭しと出た。夏には、いわゆる田舎芝居の小屋が建てられた。今も思い出す場面がある。舞台では、綺麗な着物を着た人たちが、良く判らない言葉で話していた。女の人が自分の子供に饅頭を食べさせる。子供は苦しんで死んだ。何てことをする。舞台は、女の人と死んだ子供だけになる。すると、その女の人は、子供を抱き、泣き叫んだ。だったら何であんなことするのか。私は全く理解できず大きなショックを受けたことを覚えている。今、考えると伽羅先代萩 きやうせんざいはぎ だっ
たと思う。広い境内であったが、大人になり懐かしさで訪れた時、そこは意外と狭く感じた。

道草は園児、生徒の特権だ。乾いた田んぼで蓮華 はんなげ を摘んだり、小川でおたまじゃくしを取ったりした。今だから言えるが、果樹園に忍び込み、果実を取ったりしたこともある。大抵の場合、口にした果実は、美味しくなかった。何故なのか、今もって判らない。

道草で遊ぶ園児、生徒は、遊びに夢中になるとトイレに行くのを忘れてしまう。当時は、公衆トイレなどはない。でも、心配する事は全くない。急にお腹が痛くなっても、ちょっと草むらに入り込めば、そこは、リッパなトイレに変わる。

桜や草花を眺めながら畑を歩き、芽吹きだした雑木林を抜ければ実家に辿りつく。雑木林の春。活き活きとしたこれからの時間を、約束してくれるような雰囲気。さー、何かが始まるぞー！

夏



雑木林の夏は大変です。キラキラ照り付ける太陽の下、総てが茹^ゆだつてしまします。子供の頃の夏休みは、雑木林があれば遊びは此処だけで充分。草いきれでムンムンする中、半ズボンにランニングシャツ、手ぬぐいを首に巻き、頭には麦藁帽子。ハダシに下駄をつっかけ、虫取り網をかつぎ飛び回る。ミンミン蝉、油蝉、そしてツクツクほうし。けたたましさは凄いもの。たまにクマ蝉でも居ようものなら血相変えて追いかける。薄の葉には、カマキリが釜を持ち上げ、松の木には大きな毛虫。八手の葉っぱには、デンデン虫が角を出す。

キャベツ畑、菜の花畑は、モンシロ蝶の天国だった。黄色と黄緑色に彩られた菜の花畑は、陶酔しそうな花の香りがした。そして、嫌になるほど飛び回るモンシロ蝶。優雅に飛ぶのはアゲハ蝶。同じような格好をしているも蛾は嫌われ者だ。ソツとするほど大きな蛾が街燈にぶら下がっているのを見ると、この世のものとは思えなかった。

夕立の後には、大きな蝦蟇^{がま}がノソノソと歩き出す。その言えは、青大将やヤマカガシも良く見かけた。蛙を飲み込んだ蛇のお腹はブククリと膨れ、蛇は、億劫そうにノタノタ動く。子供たちはすべに捕まえ、尻尾を持って蛙を扱^じき出す。なんとも残酷な遊びだが、これも子供たちの楽しみだった。中には、尻尾を持って振り回し、女の子がキャアキャア騒ぐのを楽しんでいる悪ガキもいた。

残酷なものといえば蛙遊びも同じだ。蛙のお尻の穴にストローを突っ込み、息を吹き込む。すると蛙のお腹が膨れてくものだ。

もっと凄い話を聞いた。煙管に溜まったヤニを、おじいちゃんから貰って

くる。そして、蛙の口に押し込むと蛙はバタバタと暴れだす。そして蛙は、大慌てで胃袋を出し、水で洗うという。当時、私は、この話を聞き、本当だろうかと疑った。私は見た事がなかったからだ。だが、最近、テレビで見たのだ。蛙が胃袋を出し、水で洗う映像を。あの子の話は本当だったのだ。

夏の朝は早起きしなければならない。仲間宝物を採られてしまうのだ。早朝の露に濡った雑木林は、カフト虫やクワガタの宝庫だった。甘酸っぱい匂いの樹液を出す木には、カフト虫、クワガタ、カナブン、蝶などがへばり付き樹液を吸っている。参加者が多すぎるのだ。何時見ても昆虫たちは、おいしい汁が出る場所を巡って喧嘩をしている。喧嘩の真ん中に足長蜂もやって来る。さすがにこの時は、子供たちは木から離れ、蜂が居なくなるのを待たなければならぬ。

皆、秘密の木を持っていた。だが、こればかりは好きな子にも教えられない。朝、雑木林で顔を合わせても、互いにソッポを向きイソイソと行ってしまふ。

そう言えば、家の中にも虫たちが良く飛び込んで来た。カフト虫やクワガタ、カナブン。皆に嫌われものの蛾も良く飛び込んできた。蛾は、外に出すのが大変である。どう考えてもあの燐粉は、気持悪い。ごく稀に玉虫もやって来た。緑の羽の中に虹のような光を放ち、それはそれは綺麗なものだ。不思議と外で玉虫を捕まえた事はない。大抵、家の中だった。タンスに入れておくとか着物が貯まるらしい。実家でも何匹か綺麗な玉虫を入れていたが、今はどうなっているのだろうか。玉虫。今、東京に居るのだろうか。

小さな虫といえば蟻んこである。一升瓶に土を入れ、蟻を飼う。ガラスに沿って巣穴を作ってくればしめたもの。蟻たちの生態観察だ。でも夢中になるのは大抵一、二ヶ月の間だけ。観察記録を取ろうと頭には浮かぶものの実行する子供はいない。飽きてしまえば瓶の事すら忘れてしまふ。

実家の小さな庭では、春に採ってきた草花が綺麗に咲いた。まるでお花畑

のようだった。

父は、桃の木や、無花果^{いちじく}、柿などを庭に植えた。それらは良く育ち、実がなると、もぎって食べたのを覚えている。無花果は、白い粘り気のある樹液を出した。果実は美味しいのに、何故、この様な液を出すのか。私は、無花果と聞くと、樹液の気持ち悪さ、葉っぱに生えたチクチクした髭のようなものを感じだす。果実は、美味しいのに。

雑木林の前に広がる畑では、スイカ、トマト、瓜、トウモロコシ、南瓜などが育っていた。畑の脇には、小さなスイカなどを捨てる場所があった。子供たちは、そのスイカを拾ってきて提灯を作る。中身を穿り出し、皮に目や鼻、口を開ける。中にロウソクを入れれば完成だ。夜、これを竹の棒につるしロウソクに火をつける。用もないのにこの提灯を持ち、林の中を歩き回った。不思議と夜の雑木林は恐くなかった。隅から隅まで知り尽くしていたためだろう。でも、トウモロコシ畑は恐かった。トウモロコシは子供の背丈の倍近くに育っている。夜中に歩くと、何かが飛び出てくるような恐さを感じた。昼間は、あのヒブを鼻につけ遊んだくせに。でも夜は全く違った。

トウモロコシ畑にまつわる怖いこといえば、子供会でのお化け大会だろう。お兄さん、お姉さんたちが計画し、コンニャクや濡れ雑巾、白い敷布、それに懐中電灯でお化けになる。子供たちは、雑木林の中を決められた道順に沿って歩かなければならない。どこにお化けがいるかは判らない。いつだったか、その道順にトウモロコシ畑が組み込まれたことがあった。あの時のトウモロコシ畑は本当に恐かった。

その時、おどかされる方よりも、おどかさ方になりたくてイライラしたことがあった。早く大きくなりたかった。だが、私が大きくなった頃、子供会はなくなっていた。

夏の夜に欠かせなかったもの。それは、蚊取り線香に蚊帳。

当時、ちょっとした水溜りには、必ずボウフラが体をピンピン動かしてい

た。自然界は非常に合理的にできてゐる。蚊の卵は、船のような形で水に浮か
んでゐる。下水道が、まだ完備していなかった頃、夏に蚊が居るのは常識だっ
た。電気式の蚊取り線香などない時代。緑色の渦巻き型の蚊取り線香は、夏の
必需品だった。スーッと立ち昇る独特な香りの煙。この香りは、間違いなく夏
の記憶である。

だが寝る前は大変だ。蚊帳吊りである。蚊帳も独特な香りを持っていた。
吊る前の状態は、緑の海。私は、必ずこの海で水泳こつこをした。ひとしきり
泳いだ後、蚊帳を吊るが、これも大変である。天井の隅にあるフックに蚊帳の
四隅と真ん中にある紐を掛けるのだが、順番をきちんとしないと、四角く開い
てはくれない。蚊帳に入る時は、裾をちよつと持ち上げ、さつと入らなければ
ならない。蚊が一緒に入ってしまったら意味がないからである。

蚊帳の中は、ちよつと異なつた世界だった。天気の良い夜であれば、雨
戸、ガラス戸を開け放ち、うちわで暑さをしのぎながら蚊帳の中からしばし外
を眺める。この様なことが、今、何処かで行なわれているのであつつか。

ヒグラシが鳴き始め、ちらほらとコオロギなどが、羽を擦りあわせ出す
と、そろそろ秋の訪れである。

実家は、石神井川の北に位置し、川までは二キロほどの距離だった。その
間に谷原の交差点を挟んでいた。今でこそ谷原の交差点や環八は、交通の要
所であり、ひっきりなしに車が行き交つてゐるが、だが当時は、交通量は極端
に少なかった。信じられないかもしれないが、夜になると静けさを感じるほど
であった。特に、雪の夜などは、深々と静けさを味わつ事ができた。

だが夏の夜は、別のものであった。南風に乗る、蛙の大合唱が聞こえてくる
のである。石神井川は水量も多く、流れも速かった。岸には、葦であらうか水
面まで葉が覆い被さっていた。立て札はなかったが、泳いではいけないと聞か
されていた。私は、一度だけ川に入った事がある。だが、子供にこの葦などで
隠された所は不気味であり、何か得たいの知れないものが潜んでゐるように感
じた。海気味悪く、暑気を感じて、すばやく川から出たことさえ覚えてゐる。

その後、石神井川は汚れ、どぶ川のようになっていました。泳ぐ事ができた川が悪臭漂つどぶ川に変身した。これが世の流れかと寂しい気持ちになったものだ。今でこそ石神井川は、護岸工事により様変わりしたが一時は酷いものだった。石神井川近辺は、二十年ほど前からであろうか、田んぼはつぶされ宅地に変わった。そして、民家が、所狭しと作られていった。

当時の石神井川周辺は、雑木林と同じような、全くの自然があった。

周辺には、田んぼが広がり、何本もの綺麗な小川が流れていた。春の田んぼは、蓮華草の薄紫色に埋まった。小川には、鮠はら、鯉、フナ、クチボソ、タナゴ、おたまじゃくしが泳ぎ回り、ザリガニ、タニシ、ヤコなどが川底を這っていた。かつて日本の自然が持っていた水中生物、昆虫、草花などの総てが、此処に生息していたように思う。そして、優雅な白鷺はくしゅうが、真っ白な羽を広げ群れ飛んでいた。

夏は蛙だらけだった。初夏には、ゼリーのような細長い卵や塊を取ってきた。家で水盤に入れ、おたまじゃくし、そして蛙になるのを楽しんだ。

しかし、彼らは知らないうちに何処かに行ってしまった。蛙になった彼らを、石神井川に返したことはない。ひよっとすると何処かで干からびていたのではなからうか。だが、子供は、そこまでの責任は感じていない。

ある夏の日、友だちが鮠はらを取りに行こうと誘ってくれた。夜中、ウツクウとして彼の家に行った。彼は、口の部分が欠けた土瓶とびんを用意していた。布を口に差し込み中に灯油を入れている。それを竹の棒に吊るし、右手にはモリを持っていた。彼は、ニコツと笑い、準備完了だと言った。真っ暗な田んぼのあぜ道を歩き、目指す小川に着いた。彼は、マッチを取り出し、土瓶の口から、ちよっただけ出ている布に火をつけた。土瓶の先からは、チヨロチヨロと炎が光った。

彼は、土瓶を吊るした竹棒を小川の水面に持っていた。こうすると鮠が光に引かれて水面に出てくるらしい。彼は慣れていた。見事にモリで鮠を突き

捕らえた。灯油の燃える匂いと、黒く光る鯰。あの光景は、いまだにハッキリと思ひ出すことができる。彼は、鯰は食べると美味しいといったが、私は付き合わなかった。

私が就職し、何年か経ったある日、偶然、彼に会った。彼は、大手電機メーカーに勤めていた。会社の話でも……と思っていると、彼は急に畑の話をした。

「今、畑を持っているけど、これは農地解放のお陰なんだ。俺んちは、江戸時代から小作農家だった。俺は、長男だから家を継ぐ。そうなると、俺は、数億円の地主になる。世の中って判らないや」

私は、数億との数字を聞き、羨ましく思ってしまった。しかし、そう言った彼の表情に、私は、何か寂しさのようなものを感じた。

彼は、数年前に亡くなった。彼は、絵が上手だった。授業中に彼が描いたアマリリスの絵を今でも覚えてる。鯰とアマリリス。この取り合わせは妙だが、私にとっては忘れ難い想い出である。彼の死因は、肝臓破裂。洗面器一杯の血を吐き、その日の内に亡くなくなったと聞いた。毎日酒を飲み、家族が止めても言うことを聞かなかったと言う。この話と私の想い出に残る彼とは一致しない。

彼の葬儀に行った。鯰とアマリリスが鮮明に蘇った。ご両親、奥様、子供たちに挨拶し、初めて奥さんと話しをした。優しい夫であり父だったという、だが、何故、彼がそうなったのかは判らなかった。

ザニガニを取るの簡単だった。小川に網を入れ、たぐ手繰り上げる。そうすると一匹や二匹は確実に入っていた。スルメの足を糸の先に結び、小川に入ればハサミでスルメを挿んだザリガニがあがってくる。バケツ一杯取ってきた茹でて食べる人もいた。だが、私の親は、絶対に食べることを許してくれなかった。多分、海老のような味ではないかと思う。

小さな釣針に赤虫を餌に、小さいなクチボソ、鮠なども釣った。タナコ

は、タモを使ったと思う。タナコは、上から見ると細い姿だが、瓶にいれ横から見ると楕円形の綺麗な姿を見ることが出来る。綺麗で可愛い魚だった。メダカも群れをなして泳いでいた。棒を突っ込み、群れはサツと動く。私は、あっちへこっちへと棒を突っ込み、飽かずメダカの動きを見ていた。その時、私は時間の経過など、全く忘れていたと思う。

麦藁帽子を脱ぎ、首に巻いた手ぬぐいが消えていき、しおからトンボが赤とらばに、そして、ミンミンゼミが、カーナ・カナカナと鳴くヒグラシに替わると、もうすぐ雑木林に秋がへる。

騒々しく活気にあふれた雑木林の夏。そして石神井川周辺のキラキラ輝く川水辺。

でもこれは、何十年前のおはなし。

秋



雑木林の秋の訪れは、夕方になるとカーナ・カナカナと鳴きたすヒグラシが教えてくれる。どこか寂しげな鳴き声。薄の穂も重たげに頭こぶを垂れ、お月様とお似合いの姿になった。

夏休みも、もうすぐ終わりで。宿題やら自由研究が気になりだす頃。あわただしく朝顔の押し花を作ったり、ヒイラギなどの葉っぱを苛性ソーダで煮て葉脈を取り、色を付けたり。

でも困ってしまうのが絵日記だった。子供の頭には、一週間前のでき事など残ってはいない。仕方がない。たった、一二行だけの日もあったりする。

雑木林の秋は、紅葉と栗の季節だ。そして、夏の風間の騒々しさが、夕方

の騒々しさへと変わっていく季節。こおろぎ、鈴虫、ガチャガチャなどが、ちよつと温った感じの夕方の空気の中で、何で、と聞きたくなる程の騒がしい鳴き声を出す季節だ。

秋の夕方は、騒々しいにもかかわらず、子供心にも何となく、もの悲しい気持ちにさせてしまつてしまう雰囲気を持っていた。

台風季節。実家のすぐ前にある雑木林の木々が大きく揺れる。木の葉を撒き散らすほどの風。台風の影響は動きが早く、切れ目から青空を見ることがある。月夜の台風は、本当に怖かった。薄暗い空に真っ黒な木々を浮き立たせ、その黒い塊が右へ左へと移動する。ガラス越しに見る黒い塊は、今にも家に襲い掛かってくるような雰囲気を持っていた。恐ろしい悪魔のような形。木造のこの家は耐えられるのだろうか。そんな不安を掻き立てる雑木林の台風。でも夜中になれば、そんな不安も関係なく子供はぐっすりと眠ってしまう。

翌朝、辺の一面は、葉っぱやタングリが付いたままの小枝、木っ端の海になる。地面は薙ぎ倒された薄や野草が波打つたように傾いている。これも又、まるで緑の海。果拾いやタングリ拾い。果はおやつ。タングリはヤシロバイの材料に。細い竹ひこを刺せば、かわいいヤシロバイが誕生する。大きめのタングリは独楽こまにもなつてくれた。

触ふれどかぶれる 漆うるし の木もあつた。秋あきになつて葉はっぱが綺麗きれいに色いろづいてくくれる。他の紅葉も綺麗だが、漆の木の紅葉はまだ格別だった。でも、触ふてはいけない。綺麗な花には刺があるというが、漆は別の武器を持っている。独特の痒み。遊びに夢中になり、気付かずにかぶれることもしばしばあつた。薄の穂は枯れて乳白色になっている。風が吹くと風に煽ふられ、あつちうち入と漂たははじめる。耳に入れると耳が聞こえなくなると、大きい子から驚かされ逃げ惑まどつたものだ。でも、これは本当なのだろうか。

薄の穂を摘み、下の方に持つてくゑ。そこを結びてまーるい可愛い姿になる。鬼子母神のミニミスクである。雑木林には、いろいろなおもちゃの材料があ

った。

薄の穂と言つと想い出すことがある。穂のテップンを切ると三十センチほどの軽い棒が残る。私の父は、クラシック音楽が大好きだった。ラジオや蓄音機を聞きながら指揮者よろしく、この棒を振るのである。もう無我の境地。近所の子供仲間がこれを見るのだ。不思議そうな顔をして。何やってんの？と必ず聞かれた。何となく恥ずかしかったことを覚えている。父に言わせると薄が一番軽く、按配が良いとのことだった。

木々の葉が落ちると、秘密の棲家すみかが出現する。夏、板切れや荒縄などを使って作った木の上の棲家。上手な子は、風寝ができるほどの棲家を作った。夏の間は、茂った葉が棲家を隠してくれる。だが、秋の訪れと共にこれらが姿を現す。こうなれば、もう秘密ではない。皆が使うことができる。太い蔓つるを取ってきて、棲家のある大きな木の枝に結わえる。ターザンターザンのことが始まる。私も良く遊んだが、漫画で見たターザンのように格好良くはいかない。隣の木に飛び移ろうとするが、出来た験がない。そもそも片手で蔓を持ってぶる下がるなんて不可能なのだ。後にターザン映画を見たが、漫画と同じように片手だけで格好良く遣っている。目を凝らして見た。何と蔓には足を入れるための隙間があり、ターザンは片足をその隙間に入れていた。ぶる下がるのではなく、蔓に乗っていたのである。知らなかった私は、何度落っこちたことか。その度に皆に笑われたのに。

冬



空っ風が吹き出すと冬が訪れる。

雑木林は、茶色一色になる。そして枯葉が二、三十センチほど積み重なる。農家の人たちは、この枯葉を大きな竹箆に集めだす。彼らの家は大きく、

家の北側は必ずと言って良いほど薄暗かった。そこに集めた枯葉を積み重ね、腐葉土を作るのだ。

枯葉は、子供たちにとっては恰好の遊びの材料である。子供の背丈くらいの手ごろな木を見つけ、この枝に枯葉を積んでいく。汗だくになりながら積む。すると、枯葉のかまくらができ上がるのだ。その中に入りお手玉や、綾取りをする。外は寒くても中は体温でホカホカ。ちょっと乾いた土の匂いのお部屋である。

焚き火などは、雑木林ではしなかった。子供たちは、誰かに言われるまでもなく、キチンと危ないことを知っていた。焚き火は、家の庭でやる。燃料はいくらでもあった。特に杉の枯れ枝は、最高の薪だった。杉の枝を地面に立て火を点ける。爆発とまではいかないが、ポーツと恐ろしい音をあげて燃え上がるのだ。この火柱の周りでインテアンごっこが始まる。ヤッホホー、ヤッホホー。たまに焚き火の上にフライパンを乗せ、ソーセージなどを炒める。これもつ、子供にとっては最高のご馳走だった。

裸足の下駄が足袋の下駄に替わっていく。寒い冬の到来だ。

寒くなると凍垂れ小僧も増えてくる。彼らの服の袖は、テカテカに光っていた。でも、そんな事は気にしない。遊びに夢中なのだ。凍垂れ小僧といっても半端ではなかった。白い凍はまだしも青っ凍である。いちいち凍をかんだりはしない。スルスルッと吸い込むのである。本当に名人芸。不思議と長くのびた凍が、全部入っていくのである。今は、こんな名人は居ないのではなからうか。

雑木林の雪は、綺麗な綺麗な別世界。

笹の葉に積もった雪は、丸く可愛い形をしている。可愛い情景なのだが、笹はパッと雪を払いのけてしまふ。そして白い雪の中に、まだ緑を残した笹の葉が出ている。白と緑の鮮やかな色合。

杉の木に積もった雪は、かわいそつだ。ある程度積もると、なだらかな杉

の枝は雪の重みで「フ」境しほなつていく。そして、雪は滑り落ちてしまつたのだ。その途端、杉の枝は、勝ち誇つたように「ピシッ」と上へと跳ね上がる。私には、この光景が美しい自然のドラマと映った。長い時間、飽かずに眺めていたことを覚えている。

子供にこつて雪こいえば雪合戦である。毛糸の手袋が「チャビチャ」に濡れても気にならない。力を入れて丸めると堅い雪団子になる。これを相手目がけて投げつけるのだ。よくぶつけられたが、作つた子供にのみ雪団子の痛さが違つた。

雪だるま作りも子供の遊びである。土などをつけずになるべく綺麗に作るには、丸める場所を選ばなくてはならない。落ち葉の上が良いのだが、上手く遣らないと葉っぱがついてしまふ。でも、土よりは始末が良い。でき上がった後で葉っぱを取り除けば良いのだ。勝手気ままに目や眉毛、鼻、口を付ける。炭などは勿体ないので木切れを使ったように思う。やんちゃ坊主は、この雪だるま目がけて雪合戦の続き。つくつた子供たちとの言い争いが始まる。××ちゃん、いつもこうなんだからー！ 人が折角作つたのにー！

家の縁側では、雪ウサギ。ナンテンの赤い実はウサギの目になる。葉っぱは耳に。綺麗な可愛い雪ウサギができ上がる。どうしても家の中に飾りたくなつた。お盆に乗せて部屋の中に入れた。でも暖かい部屋では、すぐに融けてしまふ。何となく、はかなさのような感覚を知つたのはこの頃か。

冬休み。お正月なのに、やはり宿題がある。宿題を気にしながらのお正月。晴れ着を着こんで、ちよつとおすまし。今と違いお店は全部休みだった。これから数日間は、家にあるものだけで食事をする。

おせち料理。お餅は、雑煮、のり巻き、砂糖醤油、それに黄な粉。実家のお雑煮は、鶏からダシのお澄しだった。餅は切り餅。とても美味しい。小さい時から大根と人参、蛸のなますが好きだった。それに今と違い数の子はお腹を壊すほど食へることができた。安かつたのだ。芋、牛蒡、人参などの煮しめは苦手だった。

五歳頃からだったと思うが、元旦の朝は、早起きをしなければならなかった。初詣である。雪の元日も雨の元日も関係なく出かけた。朝、三時頃起きる。身支度を整え、最寄りの駅、石神井公園駅へ。実家から歩きで四、五十分掛かる。四時ちよっと過ぎの電車に乗り明治神宮へ。とにかく寒いのだ。神宮の森は底冷えがするのに、原宿の駅から本殿まで歩かなくてはならない。結構、距離がある。手足が凍えたのを覚えている。神宮の次は靖国神社へ行く。初詣のはじめである。

父に理由を聞いたことがある。おじいちゃんも、そつしていたとの答えだった。何故、暖かい風間に行かないのかと聞いた。この時間が一番空いている。それに一年に一度くらい、寒さに身を引き締めるのも良いんじゃないかと答えた。

大學生の時に友人と夜一時頃、参拝したことがある。身動きできないほどの混み具合だった。風間の参拝もした。やはり人込みが凄い。それに玉砂利を通して土埃が舞う。父の言った事は止しかった。

家に帰るとお雑煮の準備ができています。お腹一杯食べたあとは風寝である。父が亡くなってからも、初詣の習慣を四、五年は続けたが、その後、止めてしまった。父と行く事に意義があったのかも知れない。

正月の遊びも豊富だった。独楽、ベーこま、メンコや風揚げ。それにピストルをバチバチやったのを覚えている。引き金を引くと撃鉄が、細い巻き紙についている丸い火薬を打ち、バンと破裂するおもちゃだ。なぜ、正月になるとやったのだろう。

独楽は、地面だけでなく、ウチの上でまわした。綱渡りも楽しいものだった。紐を引き、サツと手のひらに乗せ独楽がまわっている間は、動くことができる鬼ごっこもやった。上手い子は長い間まわしていられるので遠くまで走っていきける。下手な子は大変である。鬼を続けなければならぬ。

缶けりも夢中になる遊びだった。缶をけり、鬼が缶を所定の場所に置くまでで隠れるのだ。鬼は、あっちこっちを捜すが、あまりの缶から離れられない。

隠れていた子が缶をけつてしまつたのだ。そうすると初めからやり直しである。要領の悪い子は日が暮れるまで鬼をやっていた。泣きたくなるような遊びである。

ペーゴまは、コンクリートに擦りつけ力を付けなければならぬ。さもないとシートから、すぐにはじき出されてしまふ。これは、全くの決戦であつた。バケツにシートを張り、何人がペーゴまをまわす。他のペーゴまをはじき出し、最後まで残つたペーゴまが勝ちである。力のあるペーゴまを持つ子供は英雄であつた。夜遅くまでペーゴまをまわしたのを覚えてゐる。

凧は自分でも作つた。竹ひこ紙、それに凧糸。重心決めと尻尾の長さが決め手であつた。トンビ凧が好きだつたが、さすがにこの凧を作ることはできなかった。

ゴム動力の飛行機も良く作つた。東京号。この飛行機は美に良く飛んだ。模型屋からキットを買つてゐる。これも竹ヒコと紙である。プロペラは木でできていた。金物は、このプロペラの芯と、それを差し込み回転させるコの字型の部分とニューム管、それに主脚だけ。ニューム管に竹ヒコをさし主翼や尾翼を作る。この東京号は、垂直尾翼が、水平尾翼の下に付くのである。ちよつと洒落たスタイルなのだ。丁寧に主翼、水平・垂直尾翼の紙を貼る。貼り終わると霧吹きで水を掛ける。乾くと紙がピンと張るのだ。それぞれが完成すると次は組み立てだ。胴体は細い木である。主翼などの翼を付けていく。ゴムを何本か束ね金属の輪っかをつける。この輪っかをプロペラと尾翼の傍にある金具に付ける。ゴムはたわんでゐる。これが良いのだ。余裕を持ったゴムの状態が、タツプリと動力を蓄えてくれる。普通は、プロペラを指で廻して動力を貯めるが、手取り早く廻るにはワインダーを使う。これだと一廻して何回分かの動力を蓄えることができる。ゴムは力強く動力を蓄えていく。いよいよ飛行である。

言い忘れたが、東京号の舞台は雑木林ではない。冬の畑である。作物が刈り取られた畑は、格好の場所であつた。飛行をさえぎるものはない。雑木林では木々に引つ掛かつてしまふ。その頃の練馬では、電線もそれほど張りの巡らな

れてはいなかった。畑には広々とした空間があった。タツプリと動力を蓄えた東京号の飛行である。この飛行機は、本当に良く飛んだ。空高く、空遠く、心配になるほど良く飛んだ。多分この手の飛行機としては、最高傑作だったと思う。正月休みに東京号を作ったのは、やはり飛行空間があったからだと思う。冬の畑は、子供にとっての正に自由な空間であった。

宿題は、お書き初めに自由課題。書初めは正月二日。六畳の部屋に机を置き、一人で静かに筆を持つ。課題は何だったか忘れてしまったが、とにかく落ち着いて書道に勤しむ。

ある正月、小学三年生の頃だったと思う。一人で書いていると父が入ってきた。どうだい？ 私は、咄嗟に書き終わったもの、書いている途中の和紙を隠した。見せるのが恥ずかしかったのだ。父は言った。

「人に見せるのが恥ずかしいような字なら書かない方がよいよ。自分が一所懸命書いたものなら誰に見せても恥ずかしいとは思わないはずだよ」

意味は理解できたが、見せる事はできなかった。父は、何も言わず部屋を出て行った。なんとなく自分を情けないと感じた事を覚えている。

自由課題。夏に比べ冬休みの自由課題は、材料がなく困ったもの。ある冬休みであった。困っていると、母が言った。

「夏になると、あんなに出て来る虫たちなんだから、冬は多分何処かに隠れているはずよ。木の皮を剥がしてみたら」

木の皮を剥がす？ 虫が居るのかな？ 雑木林に行き皮を剥がしてみた。驚いたことにみなぎとか、幼虫、成虫が居たのだ。

松、くぬぎ、栗……。どんな名前の虫たちだったかは忘れたが、それらを標本にし、冬の木の中の虫たちこの題でまとめた。ちよっとした評判になったのを覚えている。だが発案は母であった。夏の自由課題で提出した葉脈も発案は母であった。勝手な想像だが、母が遣りたかったことを私に言ったのだと思っ

つてゐる。

冬の風物史とも言えるのが農家の堆肥作りではなかつたか。

麦ワラを刻み、落ち葉を集め、横十メートル縦五メートルほどに積み上げる。ちょうど、台形のような形になる。その上に下肥しんたい肥を振りかける。つまり人糞である。当時は、水洗トイレなどはなかった。貯め式の便所である。あの期間がくると農家の人が、肥桶こえおけを担いで汲み取りに来た。汲み取った人糞を肥溜めに入れて置く。多分、肥溜めで人糞は発酵するのではないかと思う。その下肥を、刻んだ麦ワラ、落ち葉の上に振りかけるのだ。発酵した下肥は、一種独特な匂いがしたが、新しい人糞の匂いとは違っていた。

数日経つと、この台形に変化が起きる。寒い日には、この台形から湯気が立ち昇るのだ。不思議な光景であった。まるでお湯を掛けたようにユラユラと暖かそうな湯気が立ち昇るのだ。バクテリアの影響なのだろうか、台形の中で激しい発酵が進んでいたのだと思う。そして、次第に麦ワラなどに白い粒々ができてくる。

この頃になると下肥の臭いはなくなっている。多分、これで堆肥が完成したのだと思う。農家の人が帯のついた桶を肩に背負い、畑に堆肥を撒いている姿を良く見かけた。ミシーの絵にあるような姿である。ちょっと驚いたのは、堆肥を手づかみで撒いていたことだ。すでに充分発酵した堆肥には、つまらなはい菌などは住んで居なかったのだと思う。だが、子供の目に驚きを与える光景だった。

何回かの雪を経験し、太陽の光が徐々に増してくると梅の蕾つぼみが膨らみ、雑木林に積もっていた雪がとけだしてくる。そして、雪の間の所々に丸い黒い穴が見え出す。穴の中には、濡れた落ち葉。そして草花の芽吹き。そろそろ春の到来である。

環八や目白通りが走り、騒々しい車の往来に明け暮れる練馬の一角にも、このような自然があった。大昔から二、三十年前までは、全く同じ自然の営みが繰り返されてきたのだと思う。純粋な自然の繰り返しだ。

実家の前の雑木林も無くなり民家が建てられた。石神井川も立派な護岸に

守られている。あの川辺もとつくに無くなっている。これが人間社会の発展、進歩と言ってしまうは、それまでも知れないが、確実に自然を壊しているのだ。そして、その進歩の、いや破壊の一翼をこの私も担っている。気が付いた時には、あの素晴らしい自然は無くなっていた。そして、絶対に、あの自然は戻っては来ない。

東京に住む者にとり、身近にあった自然を思い出すことには、何の意味もなくなっているのかも知れない。

故郷は遠きにありて……と詠った人がいた。彼は、東京で故郷金沢を詠ったという。遠くとは、物理的な距離なのだろうか。または心理的な距離。いや、その両方……

故郷を持つ人々は、飛行機、列車、車を使えば故郷に戻ることができる。そこが普通通りであるか、変わってしまったかは判らない。だが余程のことがない限り、そこ此処に思い出の場所、雰囲気が残っていると思う。畦道に祭られたお地藏様、肥後守で名前を刻んだ大木、釣りをした川……多分、その人は、それらを手で触るだろう。その時、その人はどのような事を感じるのだろうか。

私は、東京生まれで東京育ち。いわゆる故郷というものを持っていない。あえて言えば、何十年か前の練馬が故郷なのかも知れない。だが、何を使ってもしそこに行くことはできない。手で触ることもできない。余りにも遠くに行ってしまった故郷。そして、その故郷は、日に日に記憶からも遠ざかっていく。

木の中の虫たち……そして、カブト虫、クワガタ……

でもこれは、何十年も前のおぼなし。

妄想綴

「雑木林 春夏秋冬」

二〇〇四年七月十日

編集・発行者 エムツー・プラデオ
三谷 弘

禁無断転載・複写

M²plaDeO
Planning & Design Office

Copyright© H.Mitani